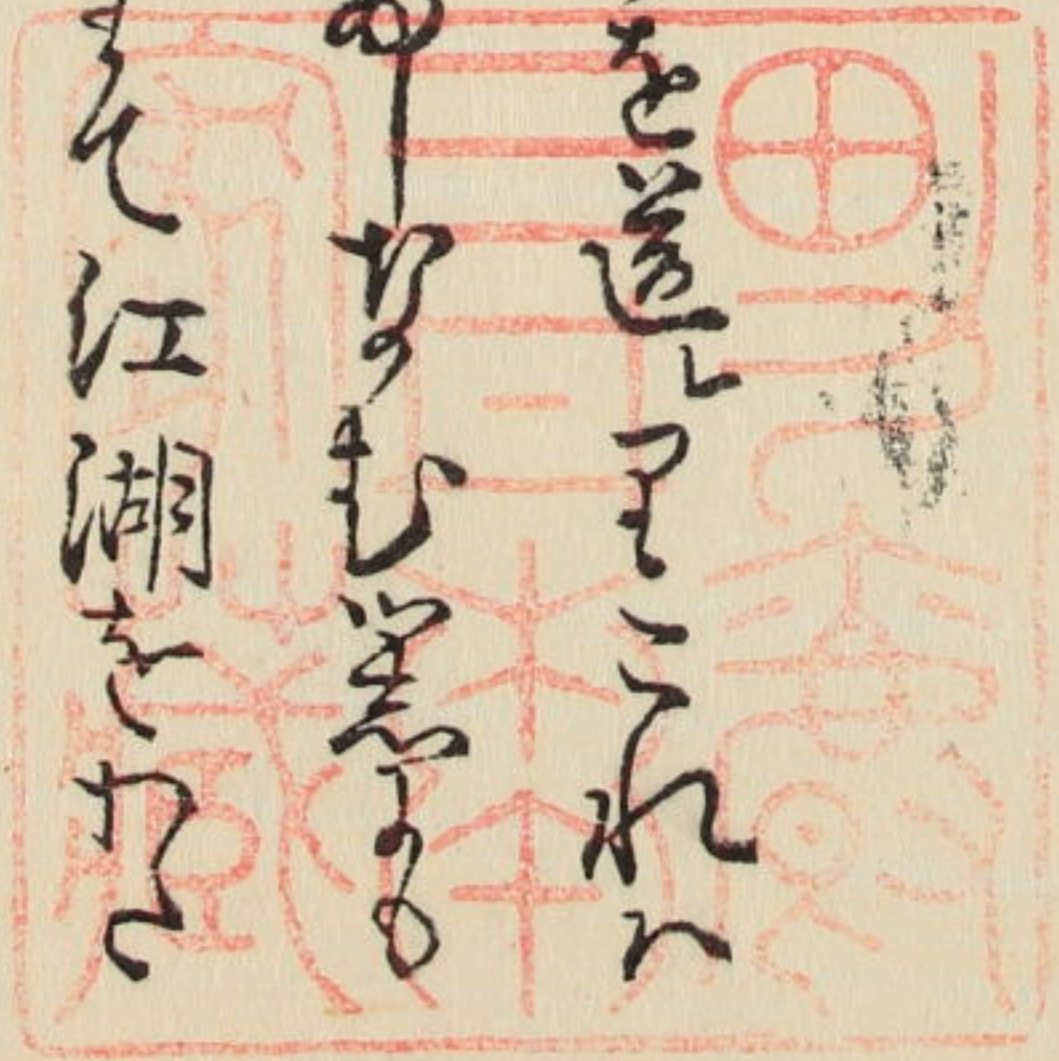


花
山
与
膳
所



江南名珠碩家よひとを道しこれ
是より將のをも酒をぬかむ
あつた或の文樽よ造らる江潮を
礼也いづるゆえに海も異なり
ほたる恵子みして用ふこと
にうつくしきおぼやとあり
あつてけらちる臨る醒て
日月陽秋こらうのけを雪あけ



わ乃園をう郭公も、つるたるとふ
かき昔知人も、んえきあつて皆風雅
乃藻思をいつると、あきと星らつた
やうらやうと、乾坤の外なる正を
花のよきをえく、毎日けつよをとり入

元禄三六月

越智
越人

花見

翁

木影をゆまけも、鶴を梅の影
西日乃とつに、なまこゝろをかり
旅人乃風かき、けいまを言ふ
なまこゝろ習ふ、ぬき刀持ヒキタ鞆
月待て、假所内裏の司名
粉白つくる、松うたやわさ
水 碩 翁 曲水 珍碩

鞅置る三歳約よ秋のまて 翁
 夕暮きさまのくく 霞ゆる雨 碩
 八辺に沈務乃涌湯は夕暮る 水
 中にも珠のれくるた山伏 翁
 竹の事を唯一文え居しりり 碩
 かたきさなをさるる高ぼるりり 水
 物おもふまよもの喰やそんぬ 翁
 月より秋歌乃独れとと露 碩

秋風ちる船をこころる波のき 水
 鷹ゆくくくや 白子る松 翁
 小歌懐花乃盡れ一歩田 碩
 巡礼死ぬる存ののをろふ 水
 何より毛蝶の現さあをれる 翁
 又虫おののゆとく ちあさ 碩
 四羅より花いともく九かち 水
 懸學みみと兒と泣あひかり 翁

と来りて此の言の碩は
酒でもけたたぬあはぬ
みよ乃目をのぞくまて
假れ持佛よむ子念は
中くよ土間よすまふ
一畝のまを里まふ
傍れくいのぬ深乃おを
舟よぬくよ明後る月
碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水

花蔭あつるまを
唯四方なる草庵
一貫た錢むの
醫者乃くまを
花候りて苦野
蛇一さくまの山
碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水

翁 十二
珍碩 十二

曲水十二

五

城碩

いろく乃々毛むらうやまのそ
 うそれと標たう差はさあぬ
 蝙蝠乃のやうなつをさうぬ
 かひ亀乃とをさうぬ
 城今
 今碩
 碩今
 今碩
 碩今

五

秋のそら宮もろを、色移ひ多
くせうくれて、くくく女侍
ふつり香乃御殿を首よひさき
小六くさく——市ちかたは
鮎釣乃ちいさく思ゆる川の端
念佛よしてたむむさつこ
く——らじし菜もくかたまはる
なぞきり乃大よむれりされ
全 碩 全 通 全 碩 全 通

娘母兼と人乃姫つれと
花きあひよ月ハ勝夜
志不のさ守縁の下を和むり
生鯛あつる浦ちうまは
け村のそらをふ醫者ちあふり
あふらんをけりそのまらと
かきくさる赤紙退庵もさ
まのほもす酒乃ほゆと
人 与 哉 荷 全 碩 全 通

な、みある 疾乃ら力をききひらき 与
蒼妻ま白くり 山々の胸中 人
うやんらん 星乃らつれの月影 与
まきもつ子の三子裸出 人
免つり 物事の喜ことちとちの里 与
文珠の初めも 殺持の思恋 人
それゆゑ又かゝるまじい 不味憎 与
はたしものまぬよ なる 羽棚 人

志乃小夜のたううをいそぐ 与
まきふらうの顔をくぬあゝし 与
汗の香をかえそ衣をぬめし 人
まきふらうに雨をぐちあせり 与
ひれはうり又百人を 膳をよ 与
まき小夜もたもちなる 接 与

跡元九

巻一

活通八

荷与十

越人八

城下

野一
倭

鉄炮乃遠音に轟たる卯月也

砂の小ま乃瘦て〜

雨凡〜守町の小貝拾りて

なまぬる一川 餅モラひ〜

暮いさ〜人志〜

秋の菖蒲花物そ〜

里東

泥土

乙州

怒誰

弥碩

雪舟は秀越の梅女に寄るに
 目の中へ花をく見事かちある
 今も又川を舟をさく堂へ
 顔乃れ花の——生つさや
 馬はる部を渡さうやとて
 一里を歩くも 下り下り
 見事なまて 云を定むるも
 花れをく 雨をく——
 筆
 野徑
 里東
 泥土
 乙洲
 怒誰
 泥土
 里東

雪舟は秀越の梅女に寄るに
 昔歩に つあく 下り下り
 梅花は 雲をく 雨をく
 若菜は 舟をく 堂へ
 今も又 川を舟を 渡さう
 顔乃れ 花の—— 生つさ
 馬はる 部を渡さう やとて
 一里を 歩くも 下り下り
 見事な まて 云を定むるも
 花れを く 雨を く ——
 野徑
 乙洲
 玆碩
 怒誰
 里東
 玆碩
 乙洲
 野徑

時くを百姓まてし為帽子
 配亦をいふ思ふ供御乃蛤
 多かかきハ船出買せん位やん
 連も力も皆と度取なり
 加凡乃大毘寺繩子喰透
 喪乃こころに用叶へるさ
 糊剛カキこもあふまらさむかた
 今思ふる有る茶食喫カキも守
 怒誰 泥土 野徑 里東 乙祝

肴後乃嗽セキは海をこり喉乾勢
 四十を老たうてかきし際
 髪を世に梳乃流を言海をり
 醉を細多ふあけて吹る
 牧村乃花ハ多る葉も多まら
 田少片隅カキ苗乃少りは
 里東 珠碩 乙祝 野徑 怒誰 泥土

野徑六
里東六

泥土六
乙州六
怒誰六
珠碩五
筆一

雜

乙列

龜乃甲裏くも時ハ鳴もた
唯半養其ま何乃ふくき
百姓乃本路仕まハ其のまて
小号せろゆるかうじの繩
獨痛く奥乃向ひろき旅の舟
蜻蛉居てまゆるち蛇

珠碩
其末
探志
岩房
正秀

秋萩乃御前よちの増え荒
 及肩
 風長れか滅乃志の成り
 野津
 常乃まきとけりて鳥都
 二嘯
 常乃やうあるかますこの塵
 乙所
 初花よ雛の事指に括ましく
 羽花
 人のそこよと恋をあらまらる
 里東
 内倉乃香に吹そとあひし笛の
 探志
 寐もたに起そはよハ鳥啼
 鳥啼

秋入乃中若りく月より
 正秀
 まゝ上京をんゆやとむ
 及肩
 蓋^{カサ}よ蓋身羽の折をけ今年来
 野徑
 雀をそりよ 籠乃ちく地を
 二嘯
 うす口をる日おんみるよとておれお地
 乙所
 袴しいなまゝ留声のむくのぬれ
 珍碩
 深くまよ本綿給の採ましく
 里東
 撰^マあまのそれくまきとあけかの
 探志

暗かりしよ茶蔭乃下をよき川
 昌房
 樽を呼ぶるをよき川
 正秀
 いさるるをよき川
 及肩
 多る波かゆる鯉棚乃秋
 野徑
 はくくや切筋の残はれん
 二嘯
 車か乃序も不の波月
 乙列
 冷あゝ味のつくとを焼川
 珠碩
 標押しよん次よおくかき
 里東

月をぬくは禿のうそをぬき
 探志
 こゝろをかきとさる侍
 昌房
 なるいふは穢縁あり細にけ
 平秀
 縄をなする寺女らと次
 及肩
 花乃比肩の目待よそをよき
 野徑
 さくらよねの獅子のよき
 二嘯

乙列 四
 珠碩 全

里東 四
 探志 全
 昌房 全
 正秀 全
 及肩 全
 野徑 全
 二嘯 全

田野

正秀

曠道や苗代時乃角大師
 けきさるまゝ心野一氣乃顔 珠碩
 け用ふとのわやえん鳴一まの元 全
 かまゑたのしと門口乃文字 秀
 月歌は利休乃家を白鼻の魚 全
 度く 芋をさるるのあり 碩

出を皆つて終くおぼやらむ 秀
片定くの木履くらぬる 碩
誓文を百もあてあはるる 秀
おのゝこゝろり侍 碩
須らくおの自由なる 秀
瓶乃忍るる 碩
月氷る解きお空の銀河 秀
骨理子飛るる 碩

了ぬやそく大脇指をあられて 秀
獨ある子も 碩
江戸酒を花喰夜に恋ひあり 秀
あい乃山弾き乃入道 全
雲雀啼里を 碩
火を吹く所を 碩
本堂ハある荒壁乃ら絶 碩
羅綾子秋志乃終しぬ 秀

齒を痛人の病を治す由ん
 藤垣乃窓の紙端を挟む
 口上果ぬいよとさうお付宜
 多小やしらよ小判を少華袴
 秋入知る肥後ちり隈本
 幾日後も信じて月見る後者
 寸布子しらぬおをやりあり
 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀

江山又元めくや吃らしく
 呼あまらやしも猶きゆり
 多祝は小人所乃雨あらし
 や一日の楓木の芽崩立
 数花よ雪路拂つるきあり
 水野まゝる場にさゆり
 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀 碩 秀

正秀十九
 珠碩 十七

寺町二条上九町

井筒屋庄兵衛板

寺町二条

